

[特集Ⅱ]

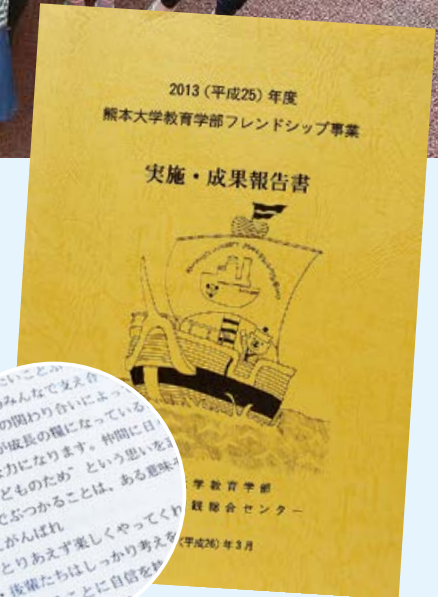


子どもたちへの 思いを船に乗せて

「熊本大学メイクフレンズ」～教育学部フレンドシップ事業～



教育学部棟の前に集まったメンバーたち



「フレのみんなが支え合
人との関わり合いによる
は全部が成長の糧になっている
大きな力になります。仲間には
・「子どものため」という思いを
中でぶつかることは、ある意味
てがんばれば
・とりあえず楽しくやってみ
・後輩たちはしっかり考え
ていることに自信を

1年間の活動実績と成果をまとめた
「実施・成果報告書」。先輩から後輩へ贈る
メッセージも取られている

大学の講義から生まれたサークル

本学には、教育学部の学生が中心となつて活動する「メイクフレンズ」というサークルがあります。このサークルは、平成9年度に文部省(現文部科学省)が全国の教員養成系大学・学部 に推奨した「フレンドシップ事業」から生まれました。教員の養成段階において、学生がさまざまな体験活動などを通して子どもたちと触れ合い、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身に付けることを目的とする事業の趣旨にのっとり、本学でも「教育実践研究指導法演習」という選択科目がスタート。当初は教員が企画・運営していました。

大きく変わるきっかけとなったのは、平成11年度に開催された「第1回フレンドシップ事業全国学生シンポジウム」(以下、全フ

し)。会場となった信州大学はこの事業のいわば先進地であり、そのころ既に、学生が自主的に企画・運営する形をとっていました。開催期間中、信州大学と同様の形式で運営したい大学を募る場面があり、その時手を挙げた数校のうちの二つが熊本大学だったのです。

学生が自ら操る、船のように

「教育実践研究指導法演習」は、いったん単位を取得すれば、次年度以降は履修する必要はないにもかかわらず、多くの学生が2度、3度と繰り返し受講していたそうです。それはつまり、彼・彼女らが「もつ子どもたちと関わる機会が欲しい！」と願っていたということ。全フレの会場で学生自らが企画・運営する形式にしたいと名乗り出たのには、このような背景があったのです。

その後、学生たちの要望に応え、「フレンドシップ事業」は1年生から参加できるサークル「メイクフレンズ」となり、学生によって自主的に企画・運営され始めました。今でもカリキュラムに組み込まれてはいるため、希望すれば単位取得も可能ですが、サークル活動として参加している学生が大



左から、副船長の奥平さん、船長の藤山さん、副船長の坂崎さん。3人とも教育学部の3年生

多数とのことでした。

サークル名の由来は「フレンドシップ事業」から。船(シップ)をシンボルマークとし、部員を「船員(クルー)」、幹部を「船長」「副船長」と呼び、毎年度作成する「事業実施・成果報告書」の表紙を船のイラストで飾っています。サークル「メイクフレンズ」は、さながら学生自らの力で航海に乗り出す船のようです。

航海で目指すのは「子ども理解」

現在、クルーは教育学部以外の学生も含め76人。子どもたちが立てた企画を年間通して支援するプランナー班、イベントを企画しその都度参加者を募集する単発班など複数の班に分かれて活動するほか、子ども会などから依頼を受け、2〜3人の志願者が赴いてレク

リエーションなどを行う外部委託型の活動も行っています。副船長を務める坂崎優平さんは、「講義で学んだことを実体験として理解できることもあり、理論と実践が結び付く貴重な場になっている」と言います。

「話し合いや一緒に活動する機会が多く、クルー間の結び付きはとて強いです」と話すのは同じく副船長の奥平萌菜美さん。レクリエーションの方法は先輩から後輩へと代々伝えられるなど、先輩の思いを受け継いでいることも感じるそうです。

船長の藤山茉優さんはこう語ります。「教育実習のない1、2年生のうちから子どもたちと触れ合えるのはこのサークルに入ったからこそ。イベントに参加した子が『楽しかったからまた来たよ!』と言ってくれるとうれしい。講義や教育実習だけでは得られない、貴重な体験をしていると思います。」「メイクフレンズ」のクルーたちは、真に子どもを理解するという目標に向かって、今日も航海を続けています。



熊本市立桜木小学校の子ども会活動に参加。約80人の子どもたちとさまざまなレクリエーションを楽しんだ



毎週水曜日の放課後に開催している定例会では、班ごとに分かれて前回の活動を反省したり、今後の活動計画を立てたりするメイクフレンズホームページ「メイフレ航海日誌」
<http://ameblo.jp/makefriends-kumamoto/>